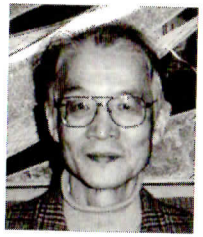
『学士會会報』第 921 号
〔2016 年 11 月〕

ロシア革命百周年を前にして

――ソ連国家の終焉過程――



塩川伸明

来たる二〇一七年はロシア革命の百周年に当たる。歴史的事件の百周年とは、通常であれば、広く人々の注目を集め、記念行事や研究集会などが行なわれるにふさわしい時機のはずだが、この例に関しては、ロシア史研究者のような「業界関係者」を別にすれば[1]、広い範囲の人々の間での注目をあまり集めないのではなかろうかとの予感がある。その理由は簡単で、この革命によって生誕したソ連という国家が百年を経ずして消滅し、記念すべき対象自体が過去のものとなったことが、人々の心理に大きく作用している。無くなったものについて今更考え直すことなどない、というわけである。

しかし、過去の時代を研究対象とする歴史学にとっては、「過去の存在となったものについて研究しても意味はない」どころか、「過去の存在となったからこそ、歴史研究の対象にふさわしくなった」と言うべきである。これはある意味で当たり前のことだが、それがなかなか気づかれない一つの要因として、ソ連国家の終焉過程について明確な像がいだかれていないことがある。

一九八〇年代後半から九〇年代初頭にかけてのソ連で「ペレストロイカ」と呼ばれる大きな変動があった

こと、その一環として冷戦の終焉が宣言されたり、それを一つの契機として東欧諸国で急激な変動があったこと、そしてそうした変動過程の最終局面でソ連国家そのものが解体に至ったこと——こうした経過そのものは、表面的には一応周知のところに属する。しかし、それがあまりにもめまぐるしい変化の連続だったため、大多数の人にとって、何が何だか分からないうちにいろんなことが継起し、それらの意味について熟考するいとまもないうちに、すべてがあっという間に過ぎ去ってしまったという、茫漠たる印象が今なお支配的であるように思われる。もともと消滅して然るべきものが消滅しただけのことで、何も驚くことはなく、その終焉過程を改めて振り返って考察する必要性もない、といった漠然たる暗黙の想定が広まっているのも、そうした事情によるだろう。

このような状況を念頭におくとき、ロシア革命によって生まれた国家が、どのような経過によって終焉に至ったかを考究することは、一種独自の形で百周年を記念するのにふさわしいかもしれない。ペレストロイカの渦中においては同時代的観察や評論が山のように現われたのに対し、距離をおいた地点からの歴史的考察はまだ緒についたばかりだが、今後本格化するであろう歴史的研究のための一石を積み始めるのも、百周年にふさわしい作業ではないかと思われる。[2]

一九八〇年代末—九〇年代初頭のソ連で相次いで生起した出来事にはいくつかの異なる契機があった。そのうち最重要のものは、国際面での冷戦終焉、国内体制の抜本的な変化（脱社会主義）、そして連邦国家の解体の三つである。これらは踵を接するようにして生じたため、あたかも一つのものであるかのように思われがちだが、よく考えてみると、これらはそれぞれに性質を異にする現象である。それぞれについて、問題領域、時期、立役者、大衆の関与について簡単に考えてみるなら、以下のようになる。

まず冷戦終焉は国際政治に関わり、時期的なピークは一九八八—九〇年にあった。立役者は、一方におけるレーガンとブッシュ（父）、他方におけるゴルバチョフであり、エリツィンはほとんど関与していない。なお、国際政治というものは主に政治エリートによって担われるものであり、大衆の直接的関与は小さかった。第二に、脱社会主義は国内の政治経済体制に関わり、時期的には一九八九—九〇年をピークとしていた。立役者はゴルバチョフおよびその周辺であり、エリツィンも有力な対抗馬だったが、両者の対抗関係は実質的な方向性を異にするというよりも、ほぼ同じ方

向を目指す中での主導権争いという性格が濃かった。なお、この過程では大規模な大衆動員が行なわれ、政治家たちへの圧力となった。第三に、ソ連解体は一つの連邦国家の多数の国家への分解であり、時期的には一九九一年末に一挙に進んだ。[3] 立役者はエリツィンおよびウクライナのクラフチュークであり、ゴルバチョフは排除された。一時高揚していた大衆運動はこの頃までにピークを過ぎており、ソ連解体は大衆の関与なしに決定された。

このように、三者はそれぞれに性格を異にするが、特に前二者とソ連解体の間の違いは大きなものがある。時期的にいえば、前二者がほぼ峠を越えた後に国家解体が急激に進行した。また前二者で中心的な役割を演じていたアクターが一挙に排除されて、別のアクターに主役をとって代わられた。とすれば、冷戦終焉および脱社会主義とソ連解体は性格を大きく異にするものと考えなくてはならない。

脱社会主義と国家解体の違いは、別の観点からも指摘することができる。ソ連とほぼ同時期的に東欧諸国も社会主義的政治・経済体制からの離脱を経験したが、それらのうち、国家の解体を伴ったのはユーゴスラヴィアとチェコスロヴァキアだけ——その他に、東ドイツは西ドイツに吸収されて消滅した——であり、大半の国々は国家解体を伴うことなく体制転換を経験した。ということは、体制転換と国家解体は別個の次元にあるということを意味する。ジャーナリスティックな用語法では、「ソ連崩壊」という言葉でもって、社会主義体制の終焉と連邦国家の解体とが漠然と同一視されているが、両者は別個の次元に属する以上、それらの区別を踏まえた上で、その関連を問う必要がある。

これまで述べてきたことを別の観点から言うならば、冷戦終焉および脱社会主義が頂点を迎えようとしていた一九八九年頃までの過程と、それがある種の行き詰まりを迎え、次第に国家解体へと転じようとする一九九〇—九一年の過程の間には、微妙ながら重要な差異があった。もともと社会主義改革論には複数の要素があったが、一九八九年頃まではそれらが渾然一体とした形で高揚したのに対し、その後には、むしろ「改革」の諸側面の間の緊張関係が立ち現われ、ある側面が前面に出る一方で他の側面が背景に退くという変化が進行したからである。

そうした変化の早い時期の端的な例は、ドイツ統一の進行の仕方に見られる。一九八九年秋—年末の東ドイツで市民運動の急激な高揚が見られたとき、その参

加者たちの多くは、西に「吸収合併」されるのを受け身的に期待するのではなく、東としての独自改革を進めてから「対等合併」するという道を描いていた。しかし、一九九〇年初頭以降の現実の急速な展開は、一刻も早い統一という願望が「対等合併」論を押し流す結果となった。東ドイツ大衆運動の主要スローガンが、Wir sind das Volk（「われわれこそ国民だ」）からWir sind ein Volk（「われわれは一つの国民だ」）へと変化したと伝えられるのはその象徴である。西ドイツでも、社会民主党やハーバーマスをはじめとする一部知識人の間では、性急な統一実現に警告を発する動きがあったが、これも孤立した。とすれば、九〇年十月のドイツ統一は古い社会主義体制——ソ連型、また東ドイツ型——の敗北を意味するだけでなく、八九年に高まった東ドイツの市民運動や西ドイツの一部知識人にとっての敗北でもあったはずだが、事態の急速な展開の中で、そのことは往々にして忘れ去られている。

国内面で重要なのは、政治改革と経済改革の緊張関係である。この二通りの改革は、着手されるまでの段階では「ともに望ましい」ものとして、相乗効果をなすと考えられていたが、一九八九—九〇年をピークとする高揚が過ぎると、両者間の緊張が前面に出てきた。市場型経済改革は短期的に実を結ぶものではなく、物価上昇、社会福祉削減、所得格差拡大などの副作用を伴う以上、それは当然のことである。しかも、それが経済グローバル化、ネオリベラル的経済政策の主流化という趨勢の中で進行した以上、「上からの資本主義化」の強行はリベラル・デモクラシー制度の定着と親和的でなく、むしろその形骸化を伴いやすい。結果的に言えば、二つの改革のうち市場経済化・資本主義化が前面に出る一方、政治改革の目標だったリベラル・デモクラシー化は、制度的には一応取り入れられても実質的にはあまり尊重されないという流れが強まった。一時期の「市民社会の再生」論や「民主化」論が退潮し、権威主義体制の再来ともいうべき現象が注目されるようになったのには、そういう背景がある。現代ロシアについて「プーチンの権威主義」が盛んに取り沙汰されているが、実はその傾向はエリツィン期に始まっていたし、かつて「改革の先頭走者」「市民社会が最も成熟している」と見なされたポーランドとハンガリーの両国で非リベラルな右翼ナショナリスト政党が政権につくという情勢は、「脱社会主義化」「市場経済化」が必ずしもリベラル・デモクラシー化の進展を伴うものでないことを物語っている。

ソ連体制が種々の意味で行き詰まっていたことは、遅くとも一九八〇年代初頭までに明らかとなっていた。しかし、そこからどのような形での変化を遂げるかということまで予め決まっていたわけではない。結果的に選ばれたのは、リベラル・デモクラシー化を単なる看板と化しつつ「上から」強行される粗野な資本主義化、そして連邦国家の解体とユーラシア地政学の地殻変動——それは冷戦期には予期されなかった種々の新しい紛争を伴った——である。これらの内実を立ち入って分析することなく、「もともと無理のある体制が倒れたのは当然のことだ」という風にだけ片付けるなら、その後に生じている種々の問題の根源を理解することもできない。百年前の革命によって生まれた国家は、ただ単に行き詰まって消滅したというだけではなく、その終焉過程に種々の気づかれざる問題を含んでいたことが今日に至る後遺症を残しているのである。

（注）

1）若手・中堅世代のロシア史研究者を中心として、岩波書店から全五巻の論集が刊行予定である。

2）現在、筆者はソ連国家解体過程の歴史的解明を主題とした多巻本の著作を執筆中であり、遠くない時期の刊行を予定している。本稿はその著作のための「はしがき」のような意味をもつ。

3）国家解体へと向かう動き自体は一九九〇年頃から始まっていたが、それを食い止めるための同盟再編の試みも遅い時期まで積み重ねられていた。それが最終的に解体という結論に至ったのは、最後の数カ月の攻防によっていた。

（東京大学名誉教授・東大・教養・昭49）

自費出版のご案内

ていねいな編集で「誇れる本」づくり

費用概算表（目安・税込）

四六判（B6判）・並製・4色カバー
（上製（ハードカバー）・4色カバー）はプラス10万円。

頁数＼部数	100部	200部	300部
150頁	65万円	71万円	77万円
200頁	79	85	92
250頁	96	102	108
300頁	110	116	122

A5判・並製・4色カバー
（上製（ハードカバー）・4色カバー）はプラス12万円。

頁数＼部数	100部	200部	300部
150頁	75万円	82万円	88万円
200頁	90	96	102
250頁	106	112	118
300頁	120	126	132

図・表と写真・絵は別途費用。手書き原稿の場合の文字入力は1字1円。

割引システム
■学士会会員割引
会員の方は5％割引。
■シニア学士会会員割引
60歳以上の会員の方は7％割引。

新刊案内

朝日・毎日・読売 社説総覧
季刊版（年4回刊）明文書房編集部 編
3大紙の社説3ヵ月分を集成
2016−Ⅰ（1月〜3月）既刊
2016−Ⅱ（4月〜6月）既刊
2016−Ⅲ（7月〜9月）既刊
・B5判・上製・各平均384頁・本体価格1万円

鉱石の生い立ち 島崎英彦
著者の専門とする金属鉱床の話を,金・白金・鉄・銅・鉛・亜鉛・ニッケル・錫といった金属種として取り上げ,またマグマ鉱床・黒鉱鉱床・スカルン鉱床などの鉱床タイプの話も織りまぜて,鉱床学の教科書など手にとる機会がない人にも,鉱床学の面白さの一端を伝える鉱石誕生の物語!
A5判・上製・280頁・本体価格1800円

えぽ叢書 歌集・句集も募集中
案内パンフレット進呈
❶詩集 日常から 井上英明
❷詩集 答えのない季節 井上敬二
❸詩集 僕はマネキンに恋をする 柳沢幸雄
❹詩集 細道のアンダンテ 川島 完
❺詩論集 随感録Ⅰ 村楢四朗
❻詩論集 随感録Ⅱ 村楢四朗
❼詩集 藤原定家のランニングシューズ 伊藤信一
B6判変型（128ミリ×156ミリ）・本体価格1000円

明文書房
〒113-0033
東京都文京区本郷2-30-14-1F
Tel 03-5842-2436 Fax 03-5842-2489
E-mail: isiken32@estate.ocn.ne.jp